

# 心理コーディネーターになるために Vol.6

山下桂永子

## ☆2月の宣告

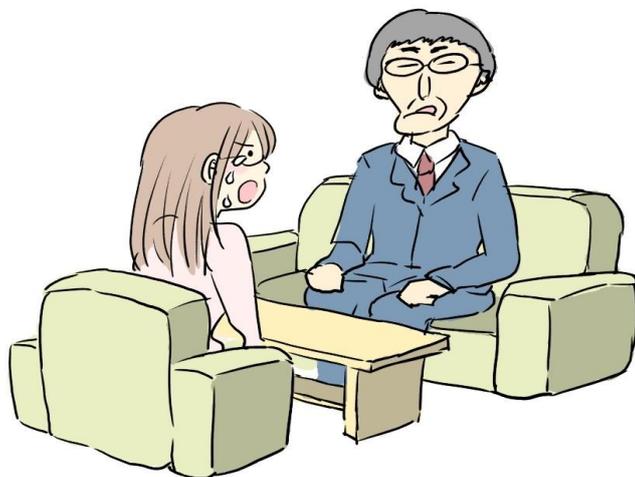
職場で泣いた。悔しくて涙が止まらなくなった。私が心理指導員として某市の教育センターで働くようになって1年弱、前年度同様に相談員の仕事をこなしつつ、教育相談全般の業務に関する取りまとめをするようになっていた矢先のことである。

昨年度、私に教育相談の取りまとめをして欲しいと予算を取ってきてくださった所長は異動になり、新しく赴任した所長になっていた。そのころの教育センターは、次々と新しい事業が舞い込み、指導主事の方々は忙し。新しい所長もそれまでは学校現場の教員であったという立場からの行政の仕事に、慣れない業務をこなしながらなかなかお忙しそうにされていたこともあり、教育相談の取りまとめについての話はあまりできないまま1年弱が経っていた。その1年目の所長から応接室に呼ばれ、来年度の教育相談の相談員の予算削減について知らされたのである。

当時私以外に7人ほどいた非常勤の相談員のうち2人の契約を更新しない、残りの相談員についても週4日の方が週2日になると告げられた。2月の初めのことである。この時期にそんなことを言われても困る、それでは来年度の教育相談は立ち行かなくなる、など何かしら言ったと思うが、正直あまりのことに呆然として記憶は曖昧である。応接室から出てきて自席に戻ると涙が止まらなくなった。

## ☆泣いて吠えた応接室

その後も何度か所長とは話し合ったが、言い合いになって終わることもしばしばで、私からの意見はただの文句としてしか受け止められなかったように思う。私としては、「自分が辞めてもいいので他の相談員の雇用を確保してほしい」、と言ったりもしたが、所長としてはすでに議会で決定している



予算を覆せるわけもない。所長からは「今更あなたが辞めたところでどうしようもない」「教育相談はあくまで 50 以上ある教育センターの事業のひとつでしかない。」「そもそも単年契約なのだから文句を言うのはおかしい」など、時にきつい口調で言い返されるばかりであった。

その度に自席に戻っては、必死に冷静になろうとするものの、目の奥底から怒りと涙がこみあげてとまらない。声を殺して泣くしかなかった。それに気づいた周りの相談員の先生方がそと後で労ってくださったり、話を聴いてくださったりもしていた。



### ☆怒りと悔しさは自分へのもの

そのころの私は怒りと悔しさで職場でも、家でもよく泣いていたと思う。何に対しての怒りと悔しさかと言えば、「これまで安い賃金で雇ってきたくせに、この時期に来年度の仕事はないとか平気（かどわかにはわからないが）と言えるなんて、長年ここでやってきた相談員の生活をなんだと思ってるんだ！」とか「予算

が増えたから（特に当時は電子黒板や PC などが現場に大量に取り入れられていた時）相談員をクビにするってなんでそんなことになるの！あの新しい電子黒板つがしたろか！」とかいうことは真っ先にあった。しかし今になって思えば、一番の怒りと悔しさはたぶん教育相談、そして心理の仕事が何をやっているのかを理解してもらえず、それを伝える力が自分には足りないと感じていたからだろうと思う。

当時の私は、教育センター以外にも、東北大震災の支援派遣やその他事故や災害などで、緊急支援のスクールカウンセラーとして活動していたことで、心理職としての自分の無力さや限界などを強く意識していた時期でもあった。自分に何ができるのかという不安がある一方で、手ごたえも少しずつ感じていたその時に、教育センター相談員としての活動が理解されず、自分ではなく、同僚の雇用を失うということが起きたのだ。自分の無力さへの怒りと悔しさだった。

それでも自分の無力さで、自分が仕事を失うならば、まだ仕方ないと思えたかもしれない。しかし、仕事を失ったのは私ではなく、これまで一緒にやってきた同僚である。給料が安くても、誠実に仕事に向かい、支えあってきて、この 1 年は、私が心理指導員としてやろうとしていたことにも理解してくれて支えてくれた同僚たちが職を失う。当の本人たちは仕方がないねと言っていたりもしたが、私はどうにも納得がいかなかった。私が残って同僚が職を失うことは、私が私を許せなかった。これまで心理職としてやってきたこと、これからやっていこうとしていたことが、全て否定されたような気持ちにもなって、悔しくて悔しくてたまらなかった。

## ☆助けを求めて知ったこと

とにかくこのまま泣き寝入りするわけにはいかない。なんとか相談員の枠を確保し、来年度も今年と同じメンバーの体制で教育相談を続けていける方法はないのかと、いろいろな人に相談した。中にはかつて教育委員会に携わっておられた経験のある先生もいて、とても誠実に話を聴いて下さり、現状の把握や整理、これからの方針を検討することを大いに助けていただいた。

その中でいろいろと気づかされたことがある。その1つが、予算を誰が取ってくるのか、ということである。教育センターの予算を組んで、議会に提出していくのは、教育委員会であり、指導主事(これは自治体によって違うのかもしれないが)である。市の他の部署や課はそれぞれ行政職のプロがいて、その行政職が中心に予算を組む。しかし指導主事は学校の先生がなるので、行政職のプロではない。つまり、行政職のプロではない指導主事が行政サービスである教育相談の予算を取ってくるのは至難の業であるということである。

それを教育センターの50ある事業のうちの1つとして、特に何か問題が出ているわけでもない、教育相談のこともまだよくわからない1年目の所長が手際よく、今年度同様の予算を取ってこれるわけではないのだ。事業が増えて教育センター全体の予算が膨らんでいる中、予算削減を前提としている行政のプロから見れば、何をしているのかわからない(トップすら把握していない)教育相談は格好の的であっただろう。今となっては、当時の所長には、(許してはいないけれど)少し同情はしている。

私がこの先、どれだけ教育センターの教育相談の機能を充実させ、子どもたち、保護者や現場の先生に喜んでもらったとしても、指導主事に、そして市の行政にその意義を理解してもらわなければ、こんな風にあっさり予算を削減され、否定されてしまう。そのことを涙して、歯噛みしながら思い知ったわけである。

でもだからといってそれを「はいそういうものですよね。」と諦めるのは簡単である。私自身も単年契約の非常勤であるし、この仕事を辞めようと思えばいつでもできる。どうすべきか年度末まで散々思い悩んだ。

## ☆ 1年前の言葉

実はこの年度末よりも1年以上前に、私が心理指導員になるかならないかのころ、この対人援助マガジンの編集長である団先生から言われた言葉がある。記憶が正確ではないが「自分を変えたらええねん、自分のできる範囲で変えると相手も変わる」というような言葉だったと思う。

その時はあまり深く考えることはなかったが、1年経ってこの言葉は、自分の仕事への意識をまるで変化させる言葉になっていた。自分が働く環境は自分の手で整えていく必要がある。元々ある枠組みの中で言われたことをやるのではなく、自分で考えて心理職としてここにいて、役に立つ、そして自分が変わることで組織を変えていく、そういう覚悟が問われている言葉なのだと感じた。

## ☆辞めるか、変えるか

その末に、「辞めるのはいやだ」と思った。10年働いてきた愛着もある。給料が安いだけの理由ならとっくに辞めている。「この仕事は好きだけど、給料面を考えると長く続けていけない」という心理職の人たちをこれまで多く見送ってきた。それでも数年の間に入れ替わる指導主事や心理職とは違って、私を含め、長く勤めている心理職以外の相談員の先生方と作り上げてきたものを切り捨てて、自分から辞めるのは嫌だった。それならば辞めるか、辞めないかじゃない、この状況を変えるか、変えないかだ。

安い給料にしがみつような雇われ根性を捨て、自分がこの仕事を続けていけるようなシステムを自分で作ろう。そして心理職が長く続けていけるチームを作ろう。そうでなければこの仕事を続けていくことはできない。変えるかしかない。予算がないからと急に減らされることのないようなシステムにしていけないといけない。そのために必要なことを考えて、言葉を尽くして理解してもらわなければならない。

変えよう。まずは自分の働き方を。そして目には見えにくい教育相談のことに対して説明できるようになり、言葉を尽くして伝えていこう。そう考えて新年度を迎えることにした。

